

「学び」における人生目標の役割に関する研究 —大学生版人生目標尺度作成の試み—

○王 小双 (上智大学)

廣瀬英子 (上智大学)

キーワード：人生目標, 尺度作成, 大学生

問題と目的

人生目標 (Purpose) は青少年の健全な成長に肝心の要素だと主張され (Bronk, Riches, & Mangan, 2018), 「Purpose」はオーストリアの精神科医 Frankl によって提唱された「Meaning」と区別され, 近年, アメリカの心理学者によって再定義されている。Damon, Menon, & Bronk (2003) によれば, 人生目標は「自分を超越する世界に意義がある (Beyond the self, 以下 BTS)」と「実際に努力する」という側面では, 「Meaning」とは区別できると主張され, また, たくさんの「Goal」を管理するところで, 「Goal」と区別できると主張されている (McKnight & Kashdan, 2009)。人生目標については, 幅広い範囲で研究が行われている。「学び」に関する研究では, 人生目標が成績や自己効力感の向上に影響し, BTS 目標を持っている学生のほうが学習課題に意義を感じ, セルフコントロールがより上手くできることが検証されている (eg., Yeager & Bundick, 2009)。しかし, 人生目標が非常に重要な概念である一方, その測定方法は難しい (Bronk, 2014)。Damon et al. (2003) の定義に沿って作られた尺度はアメリカの文化背景に基づいている。アジアの国では異なる文化背景があるため, 既存の尺度をそのまま用いるのは難しいと考えられる。以上を踏まえ, 本研究では, 大学生を主な対象として, 日本の青少年に適用できる人生目標尺度を作成することを目的とする。

方法

調査対象者 18歳以上の日本人大学生125名。
調査時期 2018年12月中旬から下旬であった。
調査内容

(1) 人生目標尺度: Revised Youth Purpose Survey (Bundick, Andrews, Jones, Mariano, Bronk, & Damon, 2006) と Claremont Purpose Scale (Bronk, Riches, & Mangan, 2018) を参考にし, 「Seeking Purpose」「Finding Purpose」「Engagement」「Beyond the self」という4因子構造を想定して, 32項目を作成した。質問項目は7件法であった。

(2) PIL研究会 (1993) による PIL 尺度の Part A: 20項目, 7件法。

(3) 成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田 (1995) による特性的自己効力感尺度: 23項目, 5件法。

(4) 尾崎・後藤・小林・沓澤 (2016) によるセルフコントロール尺度 (BSCS-J): 13項目, 5件法。

(5) 岡田・中谷 (2006) による大学生用学習動機づけ尺度: 34項目, 5件法。「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」の4因子からなる尺度。

結果と考察

分析1: 探索的因子分析と確認的因子分析

人生目標尺度について探索的因子分析を行い (最尤法・プロマックス回転), 「自己超越」因子 (5項目 $\alpha = .92$), 「生涯展望」因子 (5項目 $\alpha = .92$), 「生きがい獲得」因子 (5項目 $\alpha = .89$), 「努力体験」因子 (4項目 $\alpha = .90$), 「探索意欲」因子 (4項目 $\alpha = .84$) の5因子が抽出された。その項目例を Table 1 に示す。

Table 1 人生目標尺度の項目例

尺度名	項目例
F1 自己超越	この世界をもっと良いところにするのはあなたにとってどの程度重要ですか。
F2 生涯展望	「私はこの一生をかけても実現したい目標を真剣に考えている」ということは, あなたにどの程度ふさわしいですか。
F3 生きがい獲得	あなたはどの程度自分の生きがいを理解していますか。
F4 努力体験	長期的な目標を実現するためにあなたはどの程度努力していますか。
F5 探索意欲	あなたの存在やあなたの生活を有意義にすることについて, あなたはどの程度考えていますか。

また, 確認的因子分析を行ったところ, $GFI = .819$, $AGFI = .770$, $RMSEA = .063$, $AIC = 405.579$, $CFI = .951$, $TLI = .943$, $IFI = .952$ であった。よって, このモデルが良好だったと考えられる。

分析2: 妥当性の検討

次に, 妥当性の検討のため, 人生目標尺度の下位尺度得点及びその総得点と, PIL 尺度得点, 特性的自己効力感尺度得点, セルフコントロール尺度得点, 大学生用学習動機づけ尺度の下位尺度得点との相関関係を分析した。ピアソンの積率相関係数は Table 2 に示す。

Table 2 人生目標尺度の下位尺度得点と総得点と他指標の相関
人生目標尺度

	探索意欲	生きがい 獲得	努力体験	自己超越	生涯展望	総得点
PIL尺度	.47**	.78**	.58**	.45**	.56**	.70**
特性的自己効力感尺度	.34**	.55**	.48**	.35**	.48**	.55**
セルフコントロール 尺度	.39**	.42**	.50**	.33**	.41**	.51**
大学生用学習動機づけ 尺度						
内発	.35**	.27**	.43**	.26**	.40**	.42**
同一性	.44**	.31**	.42**	.35**	.26**	.43**
取り入れ	.06	-.06	-.13	-.01	-.20*	-.09
外的	-.20*	-.15	-.23*	-.08	-.16	-.20*

** : $p < .01$, * : $p < .05$

本研究では人生目標の4因子構造を想定して, 日本人大学生を対象に人生目標尺度の作成を試みたが, 「Seeking Purpose」「Finding Purpose」の2因子が今回のデータで「探索意欲」「生きがい獲得」と「生涯展望」に分かれ, 5因子構造になった。今回の対象者に対して, 現在有意義なことを探索し獲得することと, 「一生」という長い時間的な概念で考える目標を探索し獲得すること, とは別の概念だと考えられる。